保育実習の諸問題

——「実習日誌」に書けなかったこと——

三角 同 (東京家政大学短期大学部)

I はじめに

私たちのグループ(子どもと保育研究会)は主に関東地区にある保育者養成校の教員などで構成されているが、このところ「実習」をめぐる問題について集中的に取り組んでいる^(註)ところで保育実習において「日誌」のもつ意味はきわめて大きい。ところが実習を担当する教員の多くは記述された表面的な事柄にとらわれてしまいがちである。

ところが、例会での話し合いのなかで、あるメンバーが「私たちは実習生が日誌に書けなかった、書けなかったことを知らなくてはならないのではないか」という趣旨の発言があった。直接的な実習指導から離れてみて、私はその発言の重みに気づいたのである。まず学生たちの状況からみていくことにする。

II 学生の記録から

(1) 職員と子ども: ① 私が実習させていただいた保育園は、やはり先生は子どもを叱ります。例えば、食事については、食べるのが遅いと、他の部屋に無理矢理連れて行ったり、こぼすと、次の食事からその子のテーブルの下にだけ新聞紙を敷いたりもするので。保育園の場合、時間が決められ、それに合わせて行動をするので、こういうことが出てくるのではないかと、とも思うのですが、食事というものは、生きるために一番大切な事で精神的にも安定した状態で、消化の良いようおいしく食べるべきだと思うので、やはり、この状態とは全く逆になる保育園の指導の仕方には疑問を感じます。

② Mが食べるのがおそく、グズグズしていたので、私がちょっと話かけたら、今度は違う保育さんに“おねえさん、この子気にしなくていいわ、いつもこうだから……”といわれた。

実習中何度かこんなことがあった。私はその度にMに対して「無視」という態度をとるようという保育に

(註) 阿部和子「実習日誌をめぐる」 岡本富郎「実習評価をめぐる」何れも全国保育者養成協議会第23回研究大会発表論文集所収。

腹がたったし、“なんでそんなことをしなくてはならないのかな……”と疑問に思った。

③ 養護施設で働いておられる保育さん、指導員の先生方が毎日大変であるのは、10日間の実習でも本当によくわかりました。しかし、もう少し子どもに優しく接してあげてもよいのではないのでしょうか。集団生活においてはほんの少しの甘えも許されないものでしょうか。

(2) 職員と実習生: ④ 信じられなかったのが先生の言葉だ。「〇〇ちゃんはひきとられるみたい。まったく、いい子ばかりひきとられていくのよねえ。残るのは悪いのばかり……」と言ったのだ。自分の耳を疑った。先生がどういうつもりで言ったのか、今でもわからず、この言葉は、おそらくずっと私の胸の奥に残ることだろうと思う。

⑤ 先生方は、皆若いばかりだったので良かったと思っていたが、意地悪な先生方が少なく、ムツとする事があった。

寮に残っている幼児さん達と遊んでいるとその子の担当の先生が来て、「〇〇ちゃん、こっちにいらっしやい」と言ったり、自分の担当の子でない時には、「〇〇ちゃんは、誰れ先生の子なの、先生と遊びなさい」などと言う。子どもたちが、私たちみたいな10日間だけのお姉さんになつてしまうのには、やきもちを言っていたのかと考えたが、もしそうだとしたら、なんだか情けなくて、かわいそうにさえ思えてしまった。そして反省会では、「あんまり幼児さんと話しているところを見かけませんでした。もう少し近づいた方がよかったんじゃないかと思います」などと言っているのが驚いた。

⑥ 私の実習録は子どもの活動報告書ととられていたように思えなくなかった。先生はほとんど事務所におられ、私の実習録に対しては「今後～と注意していきたいと思います」「子ども達には、いい加減なことを言わないように注意しました」という評がかえってきたのである。10日間の実習録を読み返してみると、改めて、「実習先はどこにいればよいのだろう」という想いにとらわれる。

⑦ 園長先生は“子どものことを第一に実習を”と

いうことを何度も言われていた。“子どものことを第一に＝子どもに直接かかわらない洗濯、掃除を第一に”という事だったような気がする。あまり思い出したくない10日間である。ひとつだけ、どうしても忘れられない事がある。中2の女子が、保育室へ夏休みの宿題でミシンを使うためにきていた。私と他校の実習生が仕事をしていて一緒に保育室でしゃべりながら居た。その事を“どうせ子どもとしゃべりたいと思って実習しているんだから”というような事を言われ注意を受けた。“あーこの園では、子どもとのかかわりをもってはいけないんだ”と私は思った。もう、実習中は子どもとのかかわりたいという気持ちどこかへ行ってしまった。保育実習ではなく、洗濯実習に行ったようである。先生方も園長先生への不満を実習生の前でしゃべったりしていた。そんな先生方の冗談まじりの園長先生への批判も、聞くのが楽しみになってしまった。それほど嫌な気持ちになってしまった。

ホ) 実習先に対する先生方の態度でも気になっていたり、実習生は施設では先生方の忙しいところに入って邪魔な存在だとは思いますが、その態度を露骨に示されると私たちが困ってしまいます。

(3) 職員と職員： やはり、保育者同志でも仲間割れがあるのですね。驚きました。私達実習生がそばにいても、平気である先生の陰口をみんなで言い合ったり、おまけに副担任まで口をそろえているのです。噂のその先生は、私が実習に入って、最初に良い先生だと思っていた先生なので、次回から見方が少し変わってしまいました。

(4) 日誌について： この実習での実習録は、まさに地獄の苦しみでした。何度これさえなければと思った事か。それも、思った事をありのまま書けるならまだしも、担当の先生、園長先生に不快感を与える事のない様、言葉を選び、当たりさわりのないように書いていかなくてはならないので、それがなにより地獄の根源でした。本音というものは、とても大切な事だと思います。一生懸命書いた実習録ですが、処々にウソがあるというのは、とても淋しい事です。

「実習録には、絶対、園側を批判する様な事は書いてはなりません」という学校側の言葉はしょうがないと思いつつも、矛盾を感じます。

(5) 配当について： 掲示で実習先を知らされた時、ひどく落ちこんだ。精薄施設だったからである。保

母資格をとるためには、施設での実習も必要であると思ったときから、絶対に精薄施設だけは行きたくないと思っていた。学内でのオリエンテーションと前後して、去年の先輩方が残して下さった資料を見て、私は一層落ちこんだ。対象は児童だと思っていたのに、成人をやらされるなんて。しかも、男性を担当するかも知れないなんて。

(6) 実習日誌に書けなかった事が書けなかった学生：
① 実習中、ちょっと気になったり疑問に思った事があると、「いいんだあ。このことを宿題のレポートに書いてやるんだ」などと、心の中でつぶやいたりすることによっていつのまにか気分転換をするようになっていました。ですから、書く事がたくさんあったはずなのですが、子ども達がいとおしくなったのはもちろん、保育、指導員の皆さんには最敬礼の思いになり、書こうと思っていたことが、なにもかも消えてなくなりました。

② 実習日誌に書けなかったことというものは、私にとって特にありません。施設実習は楽しくて、完璧だったと思っただけです。保育所は、とりあえず2週間こなしたという最低の実習態度でありながらも、自分なりに信念を通じたと思っただけです。

III おわりに

ここに挙げたものをみて「実習先の陰口を奨励しているものでない」とことは了解いただけることと思う。ところで、これらの記述を一応、類型化してみると次のようになるのではないだろうか。

- (1) 「書けなかった」ことがない、というタイプ
- (2) 「書けなかった」ことを書かないタイプ
- (3) 「書けなかった」ことがある、というタイプ

ここで(2)は論外であるが、(1)は反省会や実習そのものが実によかったという印象のなかで昇華されたものと考えられる。要は(3)である。それは又、次の3つに分類できるのではないだろうか。(1)自己抑制タイプ、(2)指示されたタイプ、(3)訂正を命じられた、というものである。(2)と(3)は似ているようであるが、実習生の受け止め方は相当に異っている。実習指導上、(1)のタイプの学生は十分、留意することが重要であろう。

さいごに、今回、このような調査を実施してみ、つくづく考えさせられたのは学生との信頼関係という、きわめて常識的なことであった。